

執筆者紹介

レオナルド・セバスチャン

S・ラジャラトナム国際問題研究所 (RSIS) の准教授であり、インドネシアプログラムの調整役を担っている。著書に「Realpolitik Ideology: Indonesia's Use of Military Force (現実的政治：インドネシアの軍事力行使)」(シンガポール東南アジア研究所、2006 年) があり、審査済論文が各誌に掲載されている (Journal of Strategic Studies、Defense & Security Analysis、Cambridge Review of International Affairs、South East Asia Research、Soccer & Society、Southeast Asian Affairs、Contemporary Southeast Asia)。「International Relations in Southeast Asia: The Struggle for Autonomy (東南アジアの国際関係：自治のための闘い)」(Rowman & Littlefield、2005 年) にも寄稿している。防衛・外交政府国会委員会 (GPC-DFA) 諮問委員会のメンバー。2000 年 10 月に RSIS (当時防衛戦略研究所) に上級研究員として参画。1995 年 2 月から 2000 年 9 月まで、東南アジア研究所 (ISEAS) の研究員。オーストラリア国立大学の太平洋アジア学部・戦略防衛研究所に所属し、1997 年に同大学で博士号を取得。2003 年 10 月のインドネシアでのイスラム過激派の動向に関する国際コンペを経て、米国平和研究所 (USIP) より研究助成金を獲得。その研究結果を「Contesting Islam in Indonesia: A Contextual Study of Muslim Militancy (抗争を繰り広げるインドネシアのイスラム教徒：ムスリムの好戦性に関する文脈的研究)」と題するレポートにまとめた。2005 年 4 月、アジア財団が主催する東南アジア新興リーダー研修旅行にフリーマンフェローとして参加。フルブライト・シンガポール研究賞を授与され、2005 年 9 月から 12 月までハーバード大学ウェザーヘッド国際問題研究所のフルブライト研究員となった。2008 年 8 月 13 日から 18 日まで、インドネシア共和国外務省が主催するインドネシア大統領親善プログラムに参加。2008 年から 2010 年まで、インドネシア防衛大学 (Universitas Pertahanan) 設立に助言する立場であるインドネシア国防省の顧問を務めた。インドネシア・ジャカルタのアンコラ財団とバクリセンター財団理事会の名誉顧問も務める。これら 2 つの財団との連携

を通じて、RSIS に 370 万ドル以上の寄付を行っている。2011 年 1 月、アジア財団の顧問として、東ティモール外務協力省 (Ministério dos Negócios Estrangeiros-Timor-Leste) の国際政策顧問に就任し、第 1 回 ASEAN 会議では同省を支援。シンガポール国内外の政府機関や安全保障機関で定期的に講義を行っている。

ニック・ビズリー

ラトロープ大学国際関係論教授。ラトロープ・アジア理事長。前政治・哲学・法学部長。オーストラリアで最も古く権威のある国際関係論分野の学術誌である Australian Journal of International Affairs 誌の編集主幹。国際戦略研究所上級研究員及びワシントンの東西センター客員研究員を歴任。専門分野は、アジア太平洋の国際関係、グローバリゼーション及び大国の外交。Survival 誌、International Relations of the Asia Pacific 誌、Journal of Contemporary China 誌、Asian Survey 誌、Review of International Studies 誌を含む主要学術誌に研究成果を掲載。近著に、マーク・ビーソンとの共著による『Issues in 21st Century World Politics (21 世紀の国際政治における諸問題)』第 2 版 (Palgrave、2013 年) 及び『Great Powers in the Changing International Order (変化する国際秩序における大国)』(Lynne Rienner、2012 年) がある。

リ・ミンジャン

シンガポール・ナンヤン理工大学ラジャラトナム国際問題研究所 (RSIS) 准教授。RSIS 中国プログラム及びアジア研究プログラム修士課程コーディネーター。ボストン大学政治学博士号取得。主な専門分野は中国外交史、米中関係、アジア太平洋安全保障及び中国外交政策に及ぼす内政問題。9 冊の著書 (編著、共編著を含む) を執筆。近著は『Mao's China and the Sino-Soviet Split (毛沢東の中国と中ソ対立)』(Routledge、2012)、『Soft Power: China's Emerging Strategy in International Politics (ソフトパワー：国際政治における中国の対外戦略)』(Lexington-Rowman & Littlefield、2009)。また、Global Governance、Cold War History、Journal of Contemporary China、The Chinese Journal

of International Politics, China: An International Journal, China Security, Security Challenges, International Spectator 等の査読付き学術誌に論文を発表している。

ジャガナット・パンダ

ニューデリーにあるインド防衛研究所 (IDSA) の研究員兼東アジアセンター長。在ドイツ／イタリアの国際問題研究所 (ITS) 研究責任者 (インド事務所) も務める。研究対象は、印中関係、BRICS および新興国、中国の外交政策、アジアの多国間協力など。中国、日本、韓国のさまざまなシンクタンクや研究所とのトラック II 対話の IDSA 代表団のメンバーでもある。Strategic Analyses (Routledge)、China Report (Sage)、Journal of Contemporary China (Routledge)、Asian Perspective (Lynne Rienner)、Portuguese Journal of International Affairs (Euro press)、China and Eurasia Forum Quarterly (Central Asia-Caucasus Institute & Silk Road Studies)、Indian Foreign Affairs Journal (MD Publications Pvt Ltd) などの査読付き学術誌に論文を発表している。IDSA 入所前は、インド人材開発省社会科学研究委員会 (ICSSR) にて研究員を務めた。

庄司 智孝

防衛研究所地域研究部アジア・アフリカ研究室主任研究官。専門は東南アジア (特にインドシナ地域) の政治と安全保障、日 ASEAN 関係。東京大学より博士号 (学術)、ラジャラトナム国際問題研究所 (シンガポール) より戦略学修士号取得。最近の研究業績として “ASEAN Security Community: An Initiative for Peace and Stability” (NIDS Security Reports, No. 4, December 2008), “Pursuing a Multi-dimensional Relationship: Rising China and Japan’s Southeast Asia Policy” (Jun Tsunekawa ed., The Rise of China: Responses from Southeast Asia and Japan, NIDS, 2010), “Japan’s Security Outlook: Security Challenges and the New National Defense Program Guidelines” (Eiichi Katahara ed., Security Outlook of the Asia-Pacific Countries and Its Implications for the

Defense Sector, NIDS, 2011), and “Vietnam, ASEAN, and the South China Sea: Unity or Diverseness?” (NIDS Journal of Defense and Security, No. 13, December 2012)がある。2011～2013年に『東アジア戦略概観』（防衛研究所刊）の東南アジア章を執筆。

キム・テヒョ

成均館大学政治学科教授、新アジア研究所副所長兼国際協力担当部長、New Asia 誌編集者。アジア太平洋安全保障協力会議（CSCAP）の韓国運営委員会に参加し、日刊紙「東亜日報」の客員論説委員も務めている。北東アジアの安全保障戦略と安全保障関係を研究テーマとし、最近の著書に、Foreign Policy in the 21st Century (21世紀の対外政策) (Myung-in Books、2012年)、the Future of U.S.-Korea-Japan Relations: Balancing Values and Interests (米・韓・日関係の未来：価値観と利害のバランス) (CSIS Press、2004年)がある。安全保障関連の雑誌で70本の論文を発表している。これまで、大統領対外戦略企画官(2012年)、大統領対外戦略秘書官(2008～2011年)、外交安全保障研究所教授(2002～2005年)、慶応大学客員教授(2001年)、韓国学大学院院研究員(2000年)を務めてきた。西江大学校卒業(1990年)、コーネル大学で修士号(1993年)、シカゴ大学で博士号(1997年)を取得。2009年に中曽根康弘賞を受賞し、2012年に韓国政府より功労勲章を授与されている。

ドミトリー・トレニン

2008年よりカーネギー・モスクワ・センター所長、2003年よりカーネギー国際平和財団上級研究員を務める。1994年にカーネギー財団に加わるまでは、ソビエト軍およびロシア軍に勤務していた。イラク(軍事支援グループとの協力、1975～1976年)、ドイツ(ベルリンでの西洋諸国との連携、1978～1983年)、およびスイス(INFおよびSTARTに関する協議、1985～1991年)に従事。1977年にモスクワ防衛大学を卒業し、数年間にわたって同学で地域研究の教鞭を執った。また、NATO防衛大学のシニアフェローとなり(1993年)、退役後はブリュッ

セル自由大学の客員教授を務めた(1993～1994年)。1994～1997年には、ロシア科学アカデミー・ヨーロッパ研究所のシニアリサーチフェローとして勤務。カーネギー財団では、外交・安全保障政策プログラムを指揮している。著書には、Unconditional Peace: 21st Century Euro-Atlantic as a Security Community (無条件の平和：安全保障共同体としての21世紀の欧州大西洋)(2013年)、Post-Imperium: A Eurasian Story (ロシア新戦略—ユーラシアの大変動を読み解く)(2011年、ロシア語版および日本語版、2012年)、Solo Voyage (単独航海)(ロシアの外交政策に関するエッセイ、2009年)、Getting Russia Right (ロシアを正しく理解する)(2007年)、Central Asia. The Views from Washington, Moscow and Beijing (中央アジア：米・露・中からの見方)(2007年、共著)、Integration and Identity. Russia as a New West (統合とアイデンティティ：新たな西側としてのロシア)(2006年)、Gestrandete Weltmacht (ドイツ語、2005年)、Russia's Restless Frontier. The Chechnya Factor in Post-Soviet Russia (不穏なロシア国境：ソ連崩壊後のロシアにおけるチェチェンの要素)(共著、2004年)、The End of Eurasia: Russia on the Border Between Geopolitics and Globalization (ユーラシアの終焉：地政学とグローバリゼーションの境界に立つロシア)(2002年および2001年の2版)、A Strategy for Stable Peace. Toward a Euro-Atlantic Security Community (安定的平和に向けた戦略：欧州大西洋安全保障共同体に向けて)(共著、2002年)、Russia's China Problem (ロシアの中国問題)(1998年)、Baltic Chance: The Baltic States, Russia and the West in the Emerging Greater Europe (バルト海の機会：新興の主要ヨーロッパにおけるバルト諸国・ロシア・西欧諸国)(1997年)がある。編書には、The Russian Military. Power and Policy (ロシア軍：力と政策)(2004年)、Ambivalent Neighbors: The NATO and EU Enlargement and the Price of Membership (矛盾する隣国：NATO・EUの拡大と加盟の代償)(2003年)、Russia and the Main Security Institutions in Europe: Entering the 21st Century (ヨーロッパの主要な安全保障機関とロシア：21世紀を迎えて)(2000年)、Kosovo: International Aspects (コソボ：国際的側面)(1999年)、Commonwealth and Security in Eurasia (ユーラシアの共同体と

安全保障) (1998 年) がある。国際戦略研究所、ロシア国際問題評議会、およびスウェーデン王立軍事アカデミーのメンバーである。フィンランド国際問題研究所の国際諮問委員会に所属し、モスクワ市民教育学校の理事を務める。ニューヨークタイムズ、モスクワタイムズ、中国の環球時報など、世界のニュースメディアにコメンテーターとして頻繁に登場し、Washington Quarterly、International Politics、Pro et Contra、Insight Turkey、Baltic Course の編集局に所属している。

サトゥ・リメイエ

1998 年 7 月から 2005 年 10 月まで、米太平洋軍の研究機関であるアジア太平洋安全保障研究センター (APCCS) の研究・出版部長。2005 年 10 月から 2007 年 2 月までは、国防分析研究所 (IDA) 戦略・資源研究室の研究スタッフとして勤務後、2007 年よりワシントン東西センター所長。海軍分析センター上級顧問も兼任。東西センターでは、米・アジア太平洋関係に関するひと、国家、地域レベルでのニュース、分析、情報、グラフィックを含む超党派で信頼性の高い情報リソースである Asia Matters for America を創設した他、Asia-Pacific Bulletin の創刊編集、Global Asia 誌の編集、さらには Contemporary Southeast Asia 誌の国際諮問委員を務める他、米・アジア関係に関する活発な著作・報告活動を行い、数多くの出版物、奨学金プログラムの選評・評議委員を務める。過去には、安倍フェローとして全米民主主義基金に在籍し、ルース財団の奨学金を得て日本問題研究所 (JIIA) の研究員として勤務。ジョージタウン大学外交学院を優等で終了し、マーシャル奨学金を得てオックスフォード大学 (モードレン・カレッジ) で博士号取得。